

◆寄贈書案内

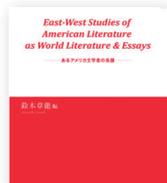
●村岡啓一先生（学校法人白鷗大学参与）より



書名：法廷弁護士  
著者：リチャード・ズイトリン  
訳者：村岡啓一  
発行：2024年11月 現代人文社刊

アメリカの司法制度に内在する有色人種に対する差別を浮き彫りにする事件の数々。不条理で構造的な人種差別に直面しながらも、果敢に権力に抗う人々。それを支えた法廷弁護士たちの涙あり、笑いありの珠玉の物語。

●関戸冬彦先生（法学部教授）より



書名：East-West Studies of American Literature as World Literature & Essays—あるアメリカ文学者の系譜—  
著者：関戸冬彦（共著）  
発行：2024年7月 一粒書房刊

アメリカ文学ないし比較文学を巡る文学論からなる第1部と、ある人物を巡る随筆からなる第2部という構成のアメリカ文学論集。関戸先生の論文は第1部に掲載されている。題して「The Great Gatsbyから学ぶ恋愛のかたち—恋愛における欲望、所有、そして必然的崩壊」。フィッツジェラルドの代表作を、恋愛における欲望という視点から読む、という興味深い論考。

●池田節雄先生（元法科大学院教授）より



書名：ハムレット異説—ガートルードの恋  
著者：池田節雄  
発行：2024年7月 彩流社刊

シェイクスピアの代表作を翻案／パロディ化した異色ともいべき小説。ガートルードとクロディアスは若き日よりすでに恋人同士であった…という想定のもとで、原作を超えるおぞましい悲劇が展開する。ハムレットの本質に根源的に迫らんとする出色の作品と言えるだろう。

●関戸冬彦先生（法学部教授）より



書名：TOEICテスト最強攻略PART3&4  
著者：関戸冬彦  
発行：2015年7月 コスモビア株式会社刊

PART3&4のQuestionを2タイプに分類。「解法のストラテジー」でリスニング力をアップするトレーニングができる。韓国最大手の教育機関によるPART3&4完全模試を4回分収録。

●宇津野花陽先生（教育学部准教授）より



書名：戦後教育史をひらく  
著者：米田俊彦ほか  
発行：2024年11月 六花出版刊

第I部・子どもの生活と教育の接点を問う、第II部・ジェンダーの視点から教育を捉える、第III部・教育改革の理念と現実を検証する、第IV部・教育・文化の格差と分断を乗り越える、の4部構成からなる。宇津野先生の論文は第II部の、「第六章 一九五〇年代の高校被服教育と繊維工業、衣服製造業」というタイトルで、一六〇頁から一八三頁に亘り形成されている。

●文芸同好会より会誌「ジョナサン城vol.4」が寄贈されました



学生団体の文化会に所属する文芸同好会（星葉会長・経営学部3年）より、会誌「ジョナサン城vol.4」が寄贈されました。文芸同好会は、現在、経営学部と法学部の男女10名が読書会などの活動をしています。メインイベントは年1回発行の会誌「ジョナサン城」の制作で、会員作による小説作品が掲載されています。今年は大作ぞろいで、優に百ページを超える厚さの誌面となりました。本学卒業生の現役作家、樂月慎（らくづき・しん）氏の書き下ろし特別寄稿作品「山羊踊りと赤い傘」が巻頭を飾り、内容も読み応え十分。図書館では是非ご覧下さい。なお、文芸同好会では会員を随時募集中です。

つぶやき

「春の木漏れ日の中で、君の優しさに、埋もれていた僕は、弱虫だったんだよね」この昭和の青春ソングが時の渦に埋もれて久しいが、恋愛の失敗を切々と歌うことが美德だった空気は、今はもうない。現代は、失敗に身を委ねる暇があったら、成功するための励ましを心待ちにする時代なのだ。でも成功も失敗もしようと思っただけのことではない。全ては時の運でしかない。そう教えてくれたのは、ほかでもない図書館の本だった。

2025(令和7年)4月1日 発行  
編集 図書館だより編集委員会  
発行 白鷗大学総合図書館  
〒323-8586 栃木県小山市駅東通り2-2-2  
ホームページ <https://library.hakuoh.jp>  
印刷 第一印刷株式会社

第二次トランプ政権発足



名誉教授

高橋 節子

1月20日、2度にわたる暗殺未遂を乗り越え、第二次トランプ政権が発足した。就任からわずか1カ月、2月20日現在、怒涛のような「トランプ革命」が進行中である。

私が国際情勢に関心を持ったのは5年前のコロナ禍が切っ掛けであった。それまでは、国際情勢はおろか、日本の政治にだってたいした興味もなく知識もなかった。それが、コロナ禍でマスコミの報道に初めて疑問を持ち、コロナワクチンで政府の方針に疑問を持ち、自分なりに必死に調べ、自ら情報を取りに行った結果、マスコミの機能は“真実”を伝えることにあるのではなく、特定の方向に世論を誘導する一種のプロパガンダ装置であることに遅まきながら気づいたのであった。だから、私の情報の取り方も読書傾向もコロナ以前とは全く別なものになった。

以下、最近読んだ本の中から、トランプ政権と関わりがありそうな三冊を取り上げてみたい。

1. 『ヒルビリー・エレジー』

アメリカ副大統領に就任したJ.D.ヴァンス（現在40歳）の回想録。政治歴わずか2年の彼をなぜトランプは副大統領に指名したのか。第一次政権時の反省を踏まえて、トランプは、絶対に“ディープステート”側に寝返らない人物を欲したと言われている。荒廃したラストベルトで育った白人労働者階級出身のヴァンスを副大統領に抜

擢した理由も、恐らくそこにある。

2. 『トランスジェンダーになりたい少女たち』  
LGBT思想が子供たちにもたらした許しがたい暴挙と悲劇。トランプは「常識」の革命を起こすと言っている。期待したい。

この本はもともとKADOKAWAから出版される予定だったのが、放火予告等の脅迫があり出版取り止めになったもの。言論の自由を侵害する行為もさることながら、あっさりと脅迫に屈した大手出版社の気概のなさにも失望した。「言論の自由」といえば、トランプ政権入りを果たしたイーロン・マスク。エックスを立ち上げ、フリースピーチ、ひいては民主主義を護ろうとする彼の闘いには全面的に賛辞を送りたい。

3. 『私たちは売りたいくない!』

「“危ないワクチン”販売を命じられた製薬会社現役社員の慟哭」という副題がついている。昨年9月に出版され、現在アマゾンで2000を超すコメントが寄せられている話題の書。mRNA型遺伝子製剤は、「ワクチン」という名称を得て、世界中で接種された。トランプはWHOからの脱退を宣言し、ワクチンの科学的根拠に懐疑的なロバート・ケネディ・ジュニアを保健福祉省長官に据えた。ワクチン行政に瑕疵はなかったのか。科学的な検証がなされ、それが日本でも真つ当に報道されることを切に願う。

# デジタル便利だけど、やはり本を読む

元法学部教授

伊藤 悟



中学3年のとき、図書委員となり、図書室の本をむさぼり読み、中学図書室の主でした。その後、研究者への第一歩として大学院に進学し、税財政法に関する貴重な書籍を大学図書館で手にすることもでき、また神田古本街がもう一つの私の図書館でもあり、先達の研究者と同様、私も、部屋が本で埋まる程の蔵書を抱えていた。引越しの度に、友人からアパートの床が抜けるかと心配された。

図書館との思い出は、修士論文を書くに当たり、関係裁判事例を調べるため、判例時報や行集の索引をみて、付箋をし、判例コピーをするという作業で1ヶ月ほどを費やし、図書館に朝から夜までいて、大学図書館の主かと。しかし、時代が移り、今日の判例データベースほどの完成度ではないが、判例データがファックスで受取れるようになり、1ヶ月の図書館籠りでの判例検索作業が1日に短縮された。そして、今日、白鷗大学総合図書館でもいくつかの判例データベースを契約され活用できる状況にあり、判例検索は、数分で作業終了する。

現代の法学部生は、判例データベースばかりでなく、法令もデジタル化され、政府内資料も各府省のWEBにてデジタル配信され、雑誌、研究論文、単著もデジタル図書として普及し、図書館や書店に行かずとも、情報収集ができる時代に居る。ゼミ論文、修士論文もデジタル情報に基づき

コピーで作成される。私自身も、10数年ほど、白書や税調答申を紙媒体のものを見ていない。

デジタル化は、どこかの牛井屋と同じで早い・安い（実は高額）、そして便利である。論文の下書きも、AI活用で、ChatGPTにて行う学生・院生もいる。かつて私もコピーして文献を読んだ気分になったこともあるが、同様に、デジタル活用で研究考察したと思っている学生・院生もいる。ブレンストレーミングすると、ボロが出る。

これからもデジタル化は進化する。しかし、読書は重要である。さらに、論文を書く場合も、参考文献としての書籍の重要性は、不変であろう。



# だれもいないとしょかんで

総合図書館事務室

田沼泰彦



誰もいない図書館で、狭い書架の間をうろついていると、たまたま出くわした愛読書の背表紙から、憶えるでもなく読んだはずの一節が、次から次へと聞こえてくるのです。まるで走馬灯のように。

（旅人は待てよ このかすかな泉に 舌を濡らす前に 考えよ人生の旅人 汝もまた岩間からしみ出た 水霊にすぎな…）

（ある人はインスピレーションを得るために毎日渋柿を十二個ずつ食った。これは渋柿を食べれば便秘する、便秘すれば逆上は必ず起こるという理論から…）

（最初の二日か三日はうまく行く。それから駄目になる。具合が悪くなる。そして酒を飲む。それでほんの少しのあいだ気分は良くなる。しかし払うべき代価はどんどん高くなり、受け取れるものはどんどん少なくなっていく。そしてあるポイントを超えると、受け取るのはただ吐き気のみということになる…）

（僕は、兵隊が、細い腕首に頑丈な掌をつけているのを見た。兵隊は他の死者と同じように、ごく小さく見える頭部をして…）

（死のうと思いました。死ぬのが本当だ、と思いました。前方の森がいやにひっそりして、漆黒に見えて、そのてっぺんから一むれの小鳥が一つまみの胡麻粒を空中に投げたように、音もなく飛び立ちました。ああ、その時です。背後の兵舎のほ

うから、誰やら金槌で釘を打つ音が、幽かに、…）  
（別のポケットの煙草が手に触れた。私は煙草を喫んだ。一ト仕事を終えて一服している人がよくそう思うように、生きようと私は思った。）…

「人は臨終を迎えたとき、人生の折々の映像が走馬灯のように蘇るのを目の当たりにする。」こういう話をよく耳にします。でもどうして映像なのか。たとえば本好きの人なら、折々に読んだ文章の断片が次々に蘇ってもよさそうなものではないか。図書館に勤務していようがまいが。

およそひとが最も自由に語りうること、それは死のことです。だって生きている限り、誰ひとり死を知ることはないのだから。死についてはどんなことでも言えるのです。が、当たり前のことを忘れてはならない。死を語るのは、生きているときだけだということを。誰もいない図書館で、走馬灯のように巡りくる文章の数々を耳にしながら、そう考えたのは誰なのかに思いを巡らせている今日このごろです。

（トカトントン）

